

氏 名	長尾 春花
ヨ ミ ガ ナ	ナガオ ハルカ
学 位 の 種 類	博士（音楽）
学 位 記 番 号	博音第315号
学 位 授 与 年 月 日	平成31年3月25日
学 位 論 文 等 題 目	〈論文〉バルトーク：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ ～バッハの無伴奏ヴァイオリン作品、バルトークのヴァイオリン作品からの考察～ 〈演奏〉バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第1番BWV1001 バルトーク：2つのヴァイオリンのための44の二重奏曲BB104より I. 44ほか バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番BWV1004より〈シャコンヌ〉 バルトーク：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタBB124
論文等審査委員	
主査	東京藝術大学 教授（音楽学部） 玉井 菜採
副査	東京藝術大学 教授（音楽学部） 大角 欣矢
副査	東京藝術大学 教授（音楽学部） 松原 勝也
副査	東京藝術大学 教授（音楽学部） 漆原 朝子
副査	東京藝術大学 准教授（音楽学部） 山崎 貴子
副査	大阪大学 教授（文学研究科） 伊東 信宏

（論文内容の要旨）

バルトークの作曲家としてのキャリアの頂点にある《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》を、バッハの無伴奏ヴァイオリン作品とバルトークのヴァイオリン作品の視点から導き出す。若い頃に書かれた《アンダンテ》、《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ》を皮切りに始まるヴァイオリン作品群は、バルトークの作曲家としての成熟の証しとなり、《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》はバルトークの音楽家人生の基本的なアイディアと内容を全て持っている傑作である。初期の《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ》を除き、ヴァイオリン作品は、バルトーク自身が演奏するために作られたピアノ作品とは対照的に、個人的な接触を持ったヴァイオリニストのために書かれていた。従って、バルトークがヴァイオリン・パートを書く時は、それぞれのヴァイオリニストの演奏スタイルが多かれ少なかれ考慮された。

バルトークのヴァイオリン作品は、これまでも多く研究の対象となっており、バルトークの人生と生涯の作品について論じている文献では、広くそれら全ての作品を扱っている。私にとってバルトークについての聖書的存在だった、伊東信宏監修『バルトーク大全集』（1999）は、バルトークの全作品の完全な概要を提供しており、その他にも、セルジュ・モルー『バルトークー生涯・作品一』（1957）、ボーニシュ・フェレンツ『写真と資料で見るーバルトークの生涯』（1981）、ポール・グリフィス『バルトークー生涯と作品』（1986）、Amanda Bayley『The Cambridge companion to Bartók』（2001）などで、バルトークの人生と生涯の作品について多くのことが言及されている。

《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》の代表的な研究文献としては、第一に、Stefan Drees『Béla Bartók Sonate für Violine solo』（2017）、そして、Malcolm Gillies『The Bartók Companion』（1993）および、Szabó Balázs『Forma és Jelentés Bartók Hegedűszonátaiban』（2015）などが挙げられる。

同時に、バッハとの関連についての研究に用いた文献として、まず、Bartók Béla『Bach: Das Wohltemperierte Klavier』（1950）、ヤープ・シュレーダー『バッハ 無伴奏ヴァイオリン作品を弾くーバロック奏法の視点からー』（2010）が挙げられ、《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第 2 番》より〈シャコンヌ〉の研究における道導となったのは、Dukay Barnabás, Ábrahám Márta『Excerpts from Eternity』（2017）であった。

私がこの論文でバルトークの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》をテーマとして選択したのは、修士課程の研究テーマにもした、無伴奏ヴァイオリン作品に対する終わらない興味からであり、特にバルトークの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》の底知れぬ魅力と、バッハの無伴奏ヴァイオリン作品の関連性について、もっと集中的に洞察してみたいと考えたからである。私が初めてバルトークの作品に取り組んだ高校生の時から、私は常にバルトークの様々な作品に興味があり、既にバルトークの代表的なヴァイオリン作品はほとんど全てを演奏していたと同時に、修士課程在学中には、バッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》全 6 曲の演奏会を経験していた。

私の論文では、バルトークの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》を中心に据え、大まかな手順として、バルトーク校訂版のバッハの《平均律クラヴィーア曲集》を手掛かりに、バッハの無伴奏ヴァイオリン作品とバルトークの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》に関連を見出し、バルトークの生涯最後の（ヴァイオリン）作品となった《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》に至るまでの彼のヴァイオリン作品の足跡から、バルトークとヴァイオリンという視点について、先行研究者たちの分析に基づいて展開させていくことでより明らかにしていく。それぞれの作品については、常に不完全さによる困難が伴うが、これらの研究によって私もまた、これまで以上に構成や過程にアプローチでき、作品をより深く詳細に受け止めることができる。

私の論文のもう一つの結果として、バルトークが学生時代から始めた彼のヴァイオリン音楽の歴史を辿ることで、ヴァイオリン作品の作曲技術の向上や音楽的表現の変化を見出すことができる。これは、バルトークとヴァイオリン作品というジャンルの関係がどのように処理されたかを知るところとなる。

《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》についての第 3 章では、メニューインによる校訂版と原典版として出版されているバルトーク・ペーテル版の比較、そしてファクシミリ版に、特に注意が払われた。もちろん、バルトークの研究における既知の分析方法を元に得た研究結果を、演奏に活かしてみることが私にとって最も重要な最終目的である。

(総合審査結果の要旨)

本研究の主旨は、バルトークの最晩年の作品《無伴奏ヴァイオリンソナタ》を、バッハの無伴奏ヴァイオリン作品との関連やバルトークの他のヴァイオリン作品の視点から読み解き、演奏において、難曲として知られる当作品のより深い理解や演奏解釈につなげることである。

論文では、第1章 バッハの無伴奏ヴァイオリン作品との関連に加えて、バルトークがバッハの《平均律クラヴィーア曲集》を校訂した楽譜からバルトーク自身のバッハ作品の演奏解釈を知ること、バルトークの《無伴奏》のテンポの設定や、アクセントの置き方を論じる手法は独創的であり、作品の理解と演奏の手がかりを得るうえで有効であったと言える。また初期の習作を含めたバルトークの全生涯にわたるヴァイオリン作品を包括的にたどり分析した第2章は、演奏家ならではの独自の演奏解釈の視点が興味深く、また無伴奏への道筋を辿るうえでは意義のあることであった。

しかし、肝心の第3章の無伴奏ヴァイオリンソナタに関して、曲の成立状況の整理、版による差異や筆者の推奨する演奏法の提案はあるが、多くが表面的なものに終わってしまった。メニューイン版と原典版の差異がなぜ生まれたのか、また自筆ファクシミリから読み取れる原初のアイディアに関しての申請者の考察、細部にわたる奏法の検証など、演奏家であるから読み取れること、またバルトークの全ヴァイオリン作品を演奏した経験からの、より具体的かつ裏付けのある演奏上の提案などがなされていれば、今後この作品を演奏するものの指針になるような、より有意義な論文になったものと思われる。また、論文全体の構造として、より体系的で緻密な論述が必要であることが望まれる。

演奏審査では、バッハの無伴奏作品からソナタ第1番とシャコンヌ、バルトークの44のデュオから29曲（共演はハンガリーの友人で同僚のネーメス・ノーラ）と《無伴奏》、という大変難易度の高いプログラムを、高い演奏能力で弾き切った。しかし、バッハ作品ではバルトークとの関連性を論じたがために、逆に解釈や演奏スタイルにやや焦点が定まらない印象を与えたのが惜しまれる。またヴァイオリンの無伴奏作品を弾く際の、ポリフォニーや和声、音程の扱いという意味でも、さらなる工夫が必要だと言える。しかし、優れた“ネイティヴの”共演者を得て演奏されたバルトークの《デュオ》や肝心の《無伴奏》の緩徐楽章などでは、申請者が研究の過程で得た知見や現在のハンガリーでの演奏活動や経験なくしてはならない表現が聴かれた。今後、研究成果がさらなる演奏活動の発展に活かされることを願う。

論文と学位審査会演奏会を総合的に判断し、博士の学位を授与するに値する研究成果であると評価する。